昭和文學全集

芥川龍之介集

昭和二十八年九月五日　初版印刷
昭和二十八年九月十日　初版發行

昭和文學全集20
芥川龍之介集

著作者　芥川龍之介
發行者　角川源義
印刷者　仙葉元太郎
東京都新宿區東大久保二ノ七八

發行所　東京都千代田區富士見町二ノ七
角川書店
振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙　本州製紙株式會社
クロース　日本クロス工業株式會社
整版所　曉印刷株式會社
印刷所　中敎印刷株式會社
製本所　鈴木製本所

Printed in Japan

芥川龍之介集

昭和文學全集

角川書店版

目次

卷頭寫眞

筆蹟

羅生門　七

鼻　一一

孤獨地獄　一五

野呂松人形　一七

芋粥　一九

世之助の話　二八

偸盜　三三

或日の大石內藏助　三三

戲作三昧　三五

蜘蛛の糸　八三

地獄變　八五

開化の殺人　一〇二

奉敎人の死　一〇八

枯野抄　一二四

あの頃の自分の事　一二九

きりしとほろ上人傳　一三九

蜜柑　一三七

沼地　一三九

鼠小僧次郎吉　一四一

舞踏會　一四九

秋　一五三

南京の基督　一六〇

杜子春　一六七

秋山圖　一七四

山鴫　一七九

藪の中　一八五

將軍　一九一

トロッコ　二〇一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

六の宮の姫君　一〇四
お富の貞操　一〇八
雛　二二四
お時儀　二二二
一塊の土　二二五
糸女覺え書　二二二
大導寺信輔の半生　二二三
年末の一日　二二六
點鬼簿　二四四
玄鶴山房　二四六
蜃氣樓　二四九
河童　二五七
三つの窓　二六一
齒車　二六五
或阿呆の一生　二九〇
藝術その他　三〇六
芭蕉雜記　三二五
解說　三二八
年譜

續芭蕉雜記　三三七
文藝的な、餘りに文藝的な　三三九
續文藝的な、餘りに文藝的な　三六〇
俳儒の言葉　三六二
西方の人　三八九
續西方の人　三九八
或舊友へ送る手記　四〇四
發句　一〇　一四　一六　三二
短歌　六二　六三　一〇一　一〇七
詩　一一八　一三八　一三六　一四〇　一五二　一六六　一七三　一八四　一九〇　二一三　二二一　二三四　二六〇　二四〇　二三五　二四三　二八四　二八九　三二八　三八八
小品
感想
吉田精一　四〇七
四一三

芥川龍之介集

多佛や　鼻の先　ミ　ケ
だけ　暮れ　残る

羅生門

或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。

廣い門の下には、この男の外に誰もゐない。唯、所々丹塗の剝げた、大きな圓柱に、蟋蟀が一匹とまつてゐる。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありさうなものである。それが、この男の外には誰もゐない。

何故かと云ふと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云ふ災がつゞいて起つた。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。書記によると、佛像や佛具を打碎いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に賣つてゐたと云ふ事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てゝ顧る者がなかつた。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盜人が棲む。とうとうしまひには、引取り手のない死人を、この門へ持つて來て、棄てゝ行くと云ふ習慣さへ出來た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味を惡るがつて、この門の近所へは足ぶみをしない事になつてしまつたのである。

その代り又鴉が何處からか、たくさん集つて來た。晝間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾のまはりを啼きながら、飛びまはつてゐる。殊に門の上の空が、夕燒けであかくなる時には、それが胡麻をまいたやうにはつきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに來るのである。——尤も今日は、刻限が遲いせゐか、一羽も見えない。唯、所々、崩れかかつた、さうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、點々と白くこびりついてゐるのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗ひざらした紺の襖の尻を据ゑて、右の頰に出來た、大きな面皰を氣にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めてゐた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待つてゐた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと云ふ當てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ歸る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたやうに、當時京都の町は一通りならず衰微してゐた。今この下人が、永年、使はれてゐた主人から、暇を出されたのも、實はこの衰微の小さな餘波に外ならない。だから「下人が雨やみを待つてゐた」と云ふよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれてゐた」と云ふ方が、適當である。その上、今日の空模樣も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申の刻下りからふり出した雨は、未に上るけしきがない。そこで、下人は、何を措いても差當り明日の暮しをどうにかしようとして——云はゞどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考へをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いてゐたのである。

雨は、羅生門をつゝんで、遠くから、ざあつと云ふ音をあつめて來る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した甍の先に、重たくうす暗い雲を支へてゐる。

どうにもならない事を、どうにかする爲には、手段を選んでゐる暇はない。選んでゐれば、築土の下か、道ばたの土の上で、饑死をするばかりである。さうして、この門の上へ持つて來て、犬のやうに棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば——下人の考へは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、何時までたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないといふ事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつける爲に、當然、その後に來る可き「盜人になるより外に仕方がない」と云ふ事を、積極的

に肯定する丈の、勇氣が出ずにゐたのである。

下人は、大きな嚏をして、それから、大儀さうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しい程の寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまつてゐた蟋蟀も、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸をちゞめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまはりを見まはした。雨風の患のない、人目にかゝる惧のない、一晩樂にねられさうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かさうと思つたからである。すると、幸ひ門の上の樓へ上る、幅の廣い、これも丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人がゐたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないやうに氣をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の樓の上へ出る、幅の廣い梯子の中段に、一人の男が、猫のやうに身をちゞめて、息を殺しながら、上の容子を窺つてゐた。樓の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頰をぬらしてゐる。短い鬚の中に、赤く膿を持つた面皰のある頰である。下人は、始めから、この上にゐる者は、死人ばかりだと高を括つてゐた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をともして、しかもその火を其處此處と動かしてゐるらしい。これは、その濁つた、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、搖れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしてゐるからは、どうせ唯の者ではない。

下人は、守宮のやうに足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這ふやうにして上りつめた。さうして體を出來る丈、平にしながら、頸を出來る丈、前へ出して、恐る恐る、樓の内を覗いて見た。

見ると、樓の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄てゝあるが、火の光の及ぶ範圍が、思つたより狹いので、數は幾つともわからない。唯、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるといふ事である。勿論、中には女も男もまじつてゐるらしい。さうして、その死骸は皆、それが、嘗、生きてゐた人間だと云ふ事實さへ疑はれる程、土を捏ねて造つた人形のやうに、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にころがつてゐた。しかも、肩とか胸とかの高くなつてゐる部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなつてゐる部分の影を一層暗くしながら、永久に啞の如く默つてゐた。

下人は、それらの死骸の腐爛した臭氣に思はず、鼻を掩つた。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩ふ事を忘れてゐた。或る強い感情が、殆ど悉くこの男の嗅覺を奪つてしまつたからである。

下人の眼は、その時、はじめて其死骸の中に蹲つてゐる人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髮頭の、猿のやうな老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持つて、その死骸の一つの顏を覗きこむやうに眺めてゐた。髮の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であらう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさへ忘れてゐた。舊記の記者の語を借りれば「頭身の毛も太る」やうに感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に插して、それから、今まで眺めてゐた死骸の首に兩手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるやうに、その長い髮の毛を一本づゝ拔きはじめた。髮は手に從つて拔けるらしい。

その髮の毛が、一本づゝ拔けるのに從つて、下人の心からは、恐怖が少しづゝ消えて行つた。さうして、それと同時に、この老婆に對するはげしい憎惡が、少しづゝ動いて來た。――いや、この老婆に對すると云つては、語弊があるかも知れない。寧、あらゆる惡に對する反感が、一分毎に強さを增して來たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考へてゐた、饑死をするか盜人になるかと云ふ問題を、改めて持出した

ら、恐らく下人は、何の未練もなく、饑死を選んだ事であらう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に插した松の木片のやうに、勢よく燃え上り出してゐたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかつた。從つて、合理的には、それを善悪の何れに片づけてよいか知らなかつた。しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云ふ事が、それ丈で既に許す可らざる悪であつた。勿論、下人は、さつき迄自分が、盗人になる氣でゐた事なぞは、とうに忘れてゐるのである。

そこで、下人は、兩足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上つた。さうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは云ふ迄もない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも彈かれたやうに、飛び上つた。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまづきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、かう罵つた。老婆は、それでも下人をつきのけて行かうとする。下人は又、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、暫、無言のまゝ、つかみ合つた。しかし勝敗は、はじめからわかつてゐる。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭ぢ倒した。丁度、鶏の脚のやうな、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしてゐた。云へ。云はぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を拂つて、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は默つてゐる。兩手をわなわなふるはせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が眶の外へ出さうになる程、見開いて、唖のやうに執拗く默つてゐる。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されてゐると云ふ事を意識した。さうしてこの意識は、今までけはしく燃えてゐた憎悪の心を、何時の間にか冷ましてしまつた。後に殘つたのは、唯、或仕事をして、それが圓滿に成就した時の、安らかな得意と滿足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し聲を柔げてかう云つた。

「己は檢非違使の廳の役人などではない。今し方この門の下を通りかゝつた旅の者だ。だからお前に繩をかけて、どうしようと云ふやうな事はない。唯、今時分この門の上で、何をして居たのだか、それを己に話しさへすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いてゐた眼を、一層大きくして、ぢつとその下人の顔を見守つた。眶の赤くなつた、肉食鳥のやうな、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、殆鼻と一つになつた唇を、何か物でも嚙んでゐるやうに動かした。細い喉で、尖つた喉佛の動いてゐるのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くやうな聲が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ傳はつて來た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、臺にせうと思うたのぢや。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。さうして失望すると同時に、又前の憎悪が、冷な侮蔑と一しよに、心の中へはいつて來た。すると、その氣色が、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い抜け毛を持つたなり、墓のつぶやくやうな聲で、口ごもりながら、こんな事を云つた。

「成程な、死人の髪の毛を抜くと云ふ事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。ぢやが、こゝにゐる死人どもは、皆、その位な事を、されてもいゝ人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりづゝに切つて干したのを、干魚だと云うて、太刀帶の陣へ賣りに往んだわ。疫病にかゝつて死なんだら、今でも賣りに往んでゐた事であろ。それもよ、この女の賣る干魚は、味がよいと云うて、太刀帶どもが、缺かさず菜料に買つてゐたさうな。わしは、この女のした事が悪いとは思うてゐぬ。せねば、饑死をするのぢやて、仕方がなくした事であろ。されば、今又、わしのしてゐた事も悪い事とは思はぬ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ぞよ。これとてもやはりせねば、饑死をするおやて、仕方がなくする事ぢやわいの。ぢやて、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであろ。」

老婆は、大體こんな意味の事を云つた。

下人は、太刀を鞘にをさめて、その太刀の柄を左の手でおさへながら、冷然として、この話を聞いてゐた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持つた大きな面皰を氣にしながら、聞いてゐるのである。しかし、之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇氣が生まれて來た。それは、さつき門の下で、この男には缺けてゐた勇氣である。さうして、又さつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇氣とは、全然、反對な方向に動かうとする勇氣である。下人は、饑死をするか盗人になるかに、迷はなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちから云へば、饑死などと云ふ事は、殆、考へる事さへ出來ない程、意識の外に追ひ出されてゐた。

「きつと、さうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るやうな聲で念を押した。さうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面皰から離して、老婆の襟上をつかみながら、嚙みつくやうにかう云つた。

「では、己が引剝をしようと恨むまいな。己もさうしなければ、饑死をする體なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剝ぎとつた。それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を數へるばかりである。下人は、剝ぎとつた檜皮色の着物をわきにかゝへて、またゝく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

暫、死んだやうに倒れてゐた老婆が、死骸の中から、その裸の體を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくやうな、うめくやうな聲を立てながら、まだ燃えてゐる火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。さうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、唯、黑洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は、誰も知らない。

（大正四年九月）

發句一

赤蛙

蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな

木がらしや東京の日のありどころ

暖かや蕊に蠟塗る造り花

痰咳の頬美しや冬帽子

夏山や山も空なる夕明り

竹林や夜寒のみちの右ひだり

霜どけの葉を垂らしたり大八つ手

木がらしや目刺にのこる海のいろ

臘梅や枝まばらなる時雨ぞら

お降りや竹深ぶかと町のそら

一游亭來る

草の家の柱半ばに春日かな

白桃や苔うるめる枝の反り

薄曇る水動かずよ芦の中

炎天にあがりて消えぬ箕のほこり

初秋の蝗つかめば柔かき

桐の葉は枝の向き枯れにけり

自嘲

水涕や鼻の先だけ暮れ残る

元日や手を洗ひをる夕ごころ

湯河原温泉

金柑は葉越しにたかし今朝の霜

あてかいが　あて字治の生まれどす

茶畠に入り日しづもる在所かな

白南風の夕浪高うなりにけり

秋の日や竹の實垂るる垣の外

野茨にからまる萩のさかりかな

荒あらし霞の中の山の襞

鼻

禪智内供の鼻と云へば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて上唇の上から顎の下まで下つてゐる。形は元も先も同じやうに太い。云はゞ細長い腸詰めのやうな物が、ぶらりと顏のまん中からぶら下つてゐるのである。

五十歳を越えた内供は、沙彌の昔から内道場供奉の職に陞つた今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで來た。勿論表面では、今でもさほど氣にならないやうな顏をしてすましてゐる。これは專念に當來の淨土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思つたからばかりではない。それより寧、自分で鼻を氣にしてゐると云ふ事を、人に知られるのが嫌だつたからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云ふ語が出て來るのを何よりも惧れてゐた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは實際的に、鼻の長いのが不便だつたからである。第一飯を食ふ時にも獨りでは食へない。獨りで食へば、鼻の先が鋺の中の飯へとゞいてしまふ。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食ふ間中、廣さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げてゐて貰ふ事にした。しかしかうして飯を食ふと云ふ事は、持上げてゐる弟子にとつても、持上げられてゐる内供にとつても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚏をした拍子に手がふるへて、鼻を粥の中へ落した話は、當時京都まで喧傳された。——けれどもこれは内供にとつて、決して鼻を苦に病んだ重な理由ではない。内供は實にこの鼻によつて傷けられる自尊心の爲に苦しんだのである。

池の尾の町の者は、かう云ふ鼻をしてゐる禪智内供の爲に、内供の俗でない事を仕合せだと云つた。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中には又、あの鼻だから出家したのだらうと批評する者さへあつた。しかし内供は、自分が僧である爲に、幾分でもこの鼻に煩される事が少くなつたと思つてゐない。内供の自尊心は、妻帶と云ふやうな結果的な事實に左右される爲には、餘りにデリケイトに出來てゐたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を恢復しようと試みた。

第一に内供の考へたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。これは人のゐない時に、鏡へ向つて、いろ〳〵な角度から顏を映しながら、熱心に工夫を凝らして見た。どうかすると、顏の位置を換へるだけでは、安心が出來なくなつて、頰杖をついたり頤の先へ指をあてがつたりして、根氣よく鏡を覗いて見る事もあつた。しかし自分でも滿足する程、鼻が短く見えた事は、是までに唯の一度もない。時によると、苦心すればする程、却て長く見えるやうな氣さへした。内供は、かう云ふ時には、鏡を箱へしまひながら、今更のやうにため息をついて、不承不承に又元の經机へ、觀音經をよみに歸るのである。

それから又内供は、絶えず人の鼻を氣にしてゐた。池の尾の寺は、僧供講說などの屢行はれる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て續いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしてゐる。從つてこゝへ出入する僧俗の類も甚多い。内供はかう云ふ人々の顏を根氣よく物色した。一人でも自分のやうな鼻のある人間を見つけて、安心がしたかつたからである。だから内供の眼には、紺の水干も白の帷子もはいらない。まして柑子色の帽子や、椎鈍の法衣なぞは、見慣れてゐるだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、唯、鼻を見た。——しかし鍵鼻はあつても、内供のやうな鼻は一つも見當らない。その見當らない事が度重なるに從つて、内供の心は次第に又不快になつた。内供が人と話しながら、思はずぶらりと下つてゐる鼻の先をつまんで見て、年甲斐もなく顏を赤めたのは、全くこの不快に動かされての所爲である。

最後に、内供は、内典外典の中に、自分と同じやうな鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようとさへ思つた事がある。けれども、目連や、舍利弗の鼻が長かつたとは、どの經文にも書いてない。勿論龍樹や馬鳴も、人並の鼻を備へた菩薩である、内供は、震旦の話の序に蜀漢の劉玄德の耳が長かつたと云ふ事を聞いた時に、それが鼻だつたら、どの位自分は心細くなくなるだらうと思つた。

内供がかう云ふ消極的な苦心をしながらも、一方では又、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざこゝに云ふ迄もない。内供はこの方面でも、殆ど出來るだけの事をした。烏瓜を煎じて飲んで見た事もある。鼠の尿を鼻へなすつて見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと脣の上にぶら下げてゐるではないか。

所が或年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上つた弟子の僧が、知己の醫者から長い鼻を短くする法を敎はつて來た。その醫者と云ふのは、もと震旦から渡つて來た男で、當時は長樂寺の供僧になつてゐたのである。

内供は、いつものやうに、鼻などは氣にかけないと云ふ風をして、わざとその法もすぐにやつて見ようとは云はずにゐた。さうして一方では、氣輕な口調で、食事の度毎に、弟子の手數をかけるのが、心苦しいと云ふやうな事を云つた。内心では勿論弟子の僧が、自分を說伏せて、この法を試みさせるのを待つてゐたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに對する反感よりは、内供のさう云ふ策略をとる心もちの方が、より强くこの弟子の僧の同情を動かしたのであらう。弟子の僧は、内供の豫期通り、口を極めて、この法を試みる事を勸め出した。さうして、内供自身も亦、その豫期通り、結局この熱心な勸告に聽從する事になつた。

その法と云ふのは、唯、湯で鼻を茹でゝ、その鼻を人に踏ませると云ふ、極めて簡單なものであつた。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしてゐる。そこで弟子の僧は、指も入れられないやうな熱い湯を、すぐに提に入れて、湯屋から汲んで來た。しかしぢかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯氣に吹かれて顏を火傷する惧がある。そこで折敷へ穴をあけて、それを提の蓋にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云つた。

——もう茹つた時分でござらう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは氣がつかないだらうと思つたからである。鼻は熱湯に蒸されて、蛋の食つたやうにむず痒い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯氣の立つてゐる鼻を、兩足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になつて、鼻を床板の上へのばしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを眼の前に見てゐるのである。弟子の僧は、時々氣の毒さうな顏をして、内供の禿げ頭を見下しながら、こんな事を云つた。

——痛うはござらぬかな。醫師は責めて踏めと申したで、ぢやが、痛うはござらぬかな。

内供は首を振つて、痛くないと云ふ意味を示さうとした。所が鼻を踏まれてゐるので思ふやうに首が動かない。そこで、上眼を使つて、弟子の僧の足に皺のきれてゐるのを眺めながら、腹を立てたやうな聲で、

——痛うはないて。

と答へた。實際鼻はむず痒い所を踏まれるので、痛いよりも却て氣もちのいゝ位だつたのである。

しばらく踏んでゐると、やがて、粟粒のやうなものが、鼻へ出來はじめた。云はば毛をむしつた小鳥をそつくり丸炙にしたやうな形である。弟子の僧は之を見ると、足を止めて獨り言のやうにかう云つた。

——之を鑷子でぬけと申す事でござつた。

内供は、不足らしく頰をふくらせて、默つて弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない譯ではない。それは分つても、自分の鼻をまるで物品のやう

に取扱ふのが、不愉快に思はれたからである。内供は、信用しない醫者の手術をうける患者のやうな顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑷子で脂をとるのを眺めてゐた。脂は、鳥の羽の莖のやうな形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである。

やがて之が一通りすむと、弟子の僧は、ほつと一息ついたやうな顔をして、

——もう一度、之を茹でればようござる。

と云つた。

内供は矢張、八の字をよせたまゝ不服らしい顔をして、弟子の僧の云ふなりになつてゐた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、何時になく短くなつてゐる。これではあたりまへの鉈鼻と大した變りはない。内供はその短くなつた鼻を撫でながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極りが悪るさうにおづおづ覗いて見た。

鼻は——あの顎の下まで下つてゐた鼻は、殆嘘のやうに萎縮して、今は僅に上脣の上で意氣地なく殘喘を保つてゐる。所々まだらに赤くなつてゐるのは、恐らく踏まれた時の痕であらう。かうなれば、もう誰も哂ふものはないのにちがひない。——鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、滿足さうに眼をしばたゝいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻が長くなりはしないかと云ふ不安があつた。そこで内供は誦經する時にも、食事をする時にも、暇さへあれば手を出して、そつと鼻の先にさはつて見た。が、鼻は行儀よく脣の上に納まつてゐるだけで、格別それより下へぶら下つて來る氣色もない。それから一晩寢てあくる日早く眼がさめると内供は先、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華經書寫の功を積んだ時のやうな、のびのびした氣分になつた。

所が二三日たつ中に、内供は意外な事實を發見した。それは折から、用事があつて、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しさうな顔をして、話も碌々せずに、じろじろ内供の鼻ばかり眺めてゐた事である。それのみならず、嘗て内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子なぞは、講堂の外で内供と行きちがつた時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらへてゐたが、とうとうこらへ兼ねたと見えて、一度にふつと吹き出してしまつた。用を云ひつかつた下法師たちが、面と向つてゐる間だけは、愼んで聞いてゐても、内供が後さへ向けば、すぐにくすくす笑ひ出したのは、一度や二度の事ではない。

内供は始、之を自分の顔がはりがしたせゐだと解釋した。しかしどうもこの解釋だけでは十分に說明がつかないやうである。——勿論、中童子や下法師が哂ふ原因は、そこにあるのにちがひない。けれども同じ哂ふにしても、鼻の長かつた昔とは、哂ふのにどことなく容子がちがふ。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽に見えると云へば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

——前にはあのやうにつけつけとは哂はなんだて。

内供は、誦しかけた經文をやめて、禿げ頭を傾けながら、時々かう呟く事があつた。愛すべき内供は、さう云ふ時に、なると、必ぼんやり、傍にかけた普賢の畫像を眺めながら、鼻の長かつた四五日前の事を憶ひ出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまふのである。——内供には、遺憾ながらこの問に答を與へる明が缺けてゐた。

——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出來ると、今度はこつちで何となく物足りないやうな心もちがする。少し誇張して云へば、もう一度その人を、同じ不幸に陷れて見たいやうな氣にさへなる。さうして何時の間にか、消極的ではあるが、或敵意をその人に對して抱くやうな事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思つたのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍觀者の利己主義をそれとなく感づいたからに外ならない。

そこで内供は日毎に機嫌が悪くなつた。二

言目には、誰でも意地悪く叱りつける。しまひには鼻の療治をしたあの弟子の僧でさへ、「内供は法慳貪の罪を受けられるぞ」と陰口をきく程になつた。殊に内供を怨らせたのは、例の悪戯な中童子である。或日、けたたましく犬の吠える聲がするので、内供が何氣なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片をふりまはして、毛の長い、痩せた尨犬を逐ひまはしてゐる。それも唯、逐ひまはしてゐるのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囃しながら、逐ひまはしてゐるのである。内供は、中童子の手からその木の片をひつたくつて、したゝかその顏を打つた。木の片は以前の鼻持上げの木だつたのである。

内供はなまじひに、鼻の短くなつたのが、反て恨めしくなつた。

すると或夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸の鳴る音が、うるさい程枕に通つて來た。その上、寒さもめつきり加はつたので、老年の内供は寢つかうとしても寢つかれない。そこで床の中でまじまじしてゐると、ふと鼻が何時になく、むず痒いのに氣がついた。手をあてて見ると少し水氣が來たやうにむくんでゐる。どうやらそこだけ、熱さへもあるらしい。

——無理に短うしたで、病が起つたのかも知れぬ。

内供は、佛前に香花を供へるやうな恭しい手つきで、鼻を抑へながら、かう呟いた。

翌朝、内供が何時ものやうに早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や橡が一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたやうに明い。塔の屋根には霜が下りてゐるせゐであらう。まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光つてゐる。禪智内供は、蔀を上げた縁に立つて、深く息をすひこんだ。

殆、忘れようとしてゐた或感覺が、再内供に歸つて來たのはこの時である。

内供は慌てゝ鼻へ手をやつた。手にさはるものは、昨夜の短い鼻ではない。上脣の上から顎の下まで、五六寸あまりもぶら下つてゐる、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、又元の通り長くなつたのを知つた。さうしてそれと同時に、鼻が短くなつた時と同じやうな、はればれした心もちが、どこからともなく歸つて來るのを感じた。

——かうなれば、もう誰も哂ふものはないにちがひない。

内供は心の中でかう自分に囁いた。長い鼻をあけ方の秋風にぶらつかせながら。

（大正五年一月）

發句二

洛陽

麥ほこりかかる童子の眠りかな
秋の日や榎の梢の片なびき

伯母の言葉を

薄綿はのばし兼ねたる霜夜かな
庭芝に小みちまはりぬ花つつじ

漢口

ひと籃の暑さ照りけり巴旦杏

病中

あかつきや蟬なきやむ屋根のうら
唐黍やほどろと枯るる日のにほひ
しぐるるや堀江の茶屋に客ひとり

再び長崎に遊ぶ

唐寺の玉卷芭蕉肥りけり
更くる夜を上ぬるみけり泥鰌汁
木の枝の瓦にさはる暑さかな
夏の日や薄苔つける木木の枝
蒲の穗はなびきそめつつ蓮の花

一海亭を送る　別情偷然

霜のふる夜を菅笠のゆくへ哉

孤獨地獄

この話を自分は母から聞いた。母はそれを自分の大叔父から聞いたと云つてゐる。話の眞僞は知らない。唯大叔父自身の性行から推して、かう云ふ事も隨分ありさうだと思ふだけである。

大叔父は所謂大通の一人で、幕末の藝人や文人の間に知己の數が多かつた。河竹默阿彌、柳下亭種員、善哉庵永機、同冬映、九代目團十郎、宇治紫文、都千中、乾坤坊良齋などの人々である。中でも默阿彌は、「江戸櫻清水清玄」で紀國屋文左衞門を書くのに、この大叔父を粉本にした。物故してから、もう彼是五十年になるが、生前一時は今紀文と綽號された事があるから、今でも名だけは聞いてゐる人があるかも知れない。――姓は細木、名は藤次郎、俳名は香以、俗稱は山城河岸の津藤と云つた男である。

その津藤が或時吉原の玉屋で、一人の僧侶と近づきになつた。本郷界隈の或禪寺の住職で、名は禪超と云つたさうである。それがやはり嫖客となつて、玉屋の錦木と云ふ華魁に馴染んでゐた。勿論、肉食妻帶が僧侶に禁ぜられてゐた時分の事であるから、表向きはどこまでも出家ではない。黃八丈の着物に黑羽二重の紋付と云ふ拵へで人には醫者だと號してゐる。――それと偶然近づきになつた。

偶然と云ふのは燈籠時分の或夜、玉屋の二階で、津藤が厠へ行つた歸りしなに何氣なく廊下を通ると、欄干にもたれながら、月を見てゐる男があつた。坊主頭の、どちらかと云へば背の低い、痩ぎすな男である。津藤は、月あかりで、これを出入の太鼓醫者竹內だと思つた。そこで、通りすぎながら、手をのばして、ちよいとその耳を引張つた。驚いてふり向く所を、笑つてやらうと思つたからである。

所がふり向いた顏を見ると、反つて此方が驚いた。坊主頭と云ふ事を除いたら、竹內と似てゐる所などは一つもない。――相手は額の廣い割に、眉と眉との間が險しく狹つてゐる。眼の大きく見えるのは、肉の落ちてゐるからであらう。左の頰にある大きな黑子は、その時でもはつきり見えた。その上顴骨が高い。――これだけの顏かたちが、とぎれとぎれに、慌しく津藤の眼にはいつた。

「何か御用かな。」その坊主は腹を立てたやうな聲でかう云つた。いくらか酒氣も帶びてゐるらしい。

前に書くのを忘れたが、その時津藤には藝者が一人に幇間が一人ついてゐた。この手合は津藤にあやまらせて、それを默つて見てゐるわけには行かない。そこで幇間が、津藤に代つて、その客に疎忽の詫をした。さうしてその間に、津藤は藝者をつれて、匆々自分の座敷へ歸つて來た。いくら大通でも間が悪かつたものと見える。坊主の方では、幇間から間違の仔細をきくと、すぐに機嫌を直して大笑ひをしたさうである。その坊主が禪超だつた事は云ふまでもない。

その後で、津藤が菓子の臺を持たせて、向うへ詫びにやる。向うでも氣の毒がつて、わざわざ禮に來る。それから二人の交情が結ばれた。尤も結ばれたと云つても、玉屋の二階で遇ふだけで、互に往來はしなかつたらしい。津藤は酒を一滴も飲まないが、禪超は寧、大酒家である。それからどちらかと云ふと、禪超の方が持物に費をつくしてゐる。最後に女色に沈湎するのも、やはり禪超の方が甚しい。津藤自身が、これをどちらが出家だか解らないと批評した。――大兵肥滿で、容貌の醜かつた津藤は、五分月代に銀鎖の懸守と云ふ姿で、平素は好んでめくら縞の着物に白木の三尺をしめてゐたと云ふ男である。

或日津藤が禪超に遇ふと、禪超は錦木のしかけを羽織つて、三味線をひいてゐた。日頃から血色の悪い男であるが、今日は殊によくない。眼も充血してゐる。彈力のない皮膚が時々口許で痙攣する。津藤はすぐに何か心配があるのではないかと思つた。自分のやうなものでも相談相手になれるなら是非させて頂

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com